

F-27 「被服学」の範囲と内容について——家政学原論研究 Ⅷ——
十文字学園女子短大 原田 一

目的 家政学の一分科である被服学について、範囲と内容を研究し、そのあり方を明らかにしようとする。

方法 被服学の性格等について論じた著書・論文を通覧し、家政学原論の立場から批判し、適切に組織することにつとめた。

結果 1 被服学の用語の整理。被服・衣服・服装・衣裳等については小川安朗氏が整理した。被服構成は、目的に応じた材料の選択、デザイン、裁断、縫製、仕上げの各過程を含む。被服整理は、洗淨、汚点抜き、整形、保管、簡易な染色等を含む。被服管理は、種類・点数の計画、購入、消費等のマネジメントをさすものとしたい。被服意匠（被服デザイン）は、形態と色彩を含むものとする。など。

2 他の科学やその一部、すなわち、服装史、服飾美学、服装社会学、服装心理学、被服衛生学、衣料経済学、繊維化学、紡績学、機織学、編組学、染色学、色彩学、被服商品学、人間工学、被服地理学等々を集めてきて、平板的に配列し、被服学を構成し得たと考えたなら誤りである。他科学の中にはそれを主として研究しているものがない、独自の領域（被服構成、被服整理、着装・整容）を中心にすえて、上記の内容を周辺部に有機的に配置すべきである。

3 被服学は芸術学中の工芸学、工学中の繊維工学、および家政学の交錯する領域である。家政学を離脱したとすれば、芸術学か工学の陣営に移るほかなく、被服学の独立は不可能である。家庭生活とその周辺を研究する家政学に止まることを望む。